
理を揺るがす者

k a t a n a

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理を揺るがす者

【Nコード】

N2609B

【作者名】

k a t a n a

【あらすじ】

妖刀を守る一族の村の青年、波我裂夜はがのさくやは、父から妖刀を封じてある祠の様子を見てきてほしいと使いを頼まれる。祠の様子を見て、異常がなかったのを確認し、村に戻る裂夜だったが……

プロローグ・不吉の予兆（前書き）

この小説には、グロテスクな表現が含まれております。

プロローグ・不吉の予兆

薄暗い、闇の中、一人の男が、数多の屍の中に立っている。
強烈な、死の匂いが男の周りを覆うが、男は途中で、少しも顔を歪めずに笑っていた。

端から見たら、異常なこの光景は、男にとっては、日常的な光景だった。

その中で、男は、銀色に輝く月を見上げ、いつものように思う。

嗚呼……この世は…

こんなにも、汚れている……

月はあれほど……

…美しいのに…

一陣の風が男の身を撫でるように吹き荒んでいたとある夜。

…それは…

…この世の理…

つまり…森羅万象にとって…

…絶望の始まりだった。

プロローグ・不吉の予兆（後書き）

初めて書いた小説なので、うまく書けていないと思うのですが、よろしかったらご意見やご感想のほうを宜しくお願いします。

一節 最後の平穩

夢をみている…。

曖昧な記憶の中…。

俺は誰かに頭を撫でられていた…。

『必ず、守ってやる。だから、心配するな』

俺の頭を撫でている人物は、そう呟いて何かを決心している。

いつの記憶なのか…目の前の人物が誰なのか…全く覚えていない。

ただ一つ言える事は…俺はこの光景を見たことがある…。

…それだけ…。

小鳥のさえずりが聞こえてくる清々しい朝。

俺は、ゆっくりと瞼を開いた。

随分と寝ていたらしい。

部屋の障子には、明るい光が差し込んでいる。

俺は、いつも日が昇る頃に畑仕事に出掛けていて、本来なら今頃働いている時刻なのだが、この日は、使いを頼むから畑仕事は休むようにと親父殿に言われ、その時刻まで安眠を貪っていた。

日頃の疲れが溜まっているので、もう少し寝ていたい、もうそろ

そろ、使いの時刻なので、起きた方がいいたろう…。

俺は気だるさを引きずったまま、寢床を後にした。

「裂夜：やっと、起きたか。今起こしに行こうとしたところだ」

波我^{はがの} 裂夜^{さくま}：それが俺の名前だ。

俺の名を呼ぶこの人の名は、波我^{はがの} 裂真代々^{さくま}この村に伝わる妖刀を
守る一族の長であり、俺の父親だ。

今日は、起きるのが遅かったせいで、親父殿一人に飯の支度をさせ
てしまったらしい。

居間には、うまそうな、飯の匂いが漂っている。

「遅くなって済まない、親父殿：もっと早く起きて手伝いたかった
のだが……」

「なに…気にすることはない。お前は、働き過ぎだからな。たまに
は、ゆっくりとした方がいい」

「そう言ってくれると有り難い…変わりと言ったらなんだが、夜は
俺が飯の支度をしよう」

俺が、申し訳なさそうに謝ると、親父殿は、義理堅い奴だと笑いな
がら、茶碗に米を盛り付けていく。
俺と親父殿は本当の親子ではない。

本当の両親は、大和を歩き回る旅芸人だったのだが、俺が五つの時、
山道を歩いている最中に、夜盗に襲われ、俺の目の前であっさりと

殺された。

勿論、その光景を見ていた俺も殺されるはずだったのだが、偶然近くを通りかかった今の親父殿が、あつという間に夜盗達を斬り倒し、幼き頃の俺を助けてくれた。

両親の亡骸を見て泣き叫ぶ俺を、親父殿は不憫に思ったのだろう…そのまま俺を養子に迎えたのだ。しばらく、口も聞かずに泣き叫ぶだけだった俺を、この人は必死になだめてくれた。

そのおかげで俺は、次第に笑顔を取り戻していったのだ…。

今の俺がいるのもすべて、親父殿のおかげと言っても過言ではない。

義理堅くなるのも当然のことだった。

「親父殿。それで、使いの話だが、今日は、何をしてくればよいのだ？」

俺は、昼飯を食べながら、親父殿に、使いの事について聞き始めた。

「ああ、そのことなんだが…この村に妖刀があることは知っているな？」

親父殿も、おかずの川魚を頬張りながら話を進める。

「ああ、なんでもこの村に住んでいる人々が、代々管理してきたって言う伝説の妖刀だろう？それが、どうかしたのか？」

この村に住んでいる者ならば、妖刀の事を知らない者などはいない…。
なんでも、妖刀には、おぞましい悪鬼が封印されていて、その太刀を一度でも手に取ると、宿っている悪鬼に呪われ、この世に災いをもたらすと言われている危険な代物らしい…。

だから、幼い頃には妖刀が封印されている村はずれの祠には決して近づくな、と言われてきていた…。

そう言う理由で、この村で、あの太刀を知らない者はいないというわけだ…。

「それで、その妖刀がどうかしたのか？」

「いや、近頃、近隣の村から使いが来てな、結界が張られていない十里ほど離れた村が、妖や悪鬼の百鬼夜行に遭遇して、壊滅的な被害にあっただらしいのだ…。」

「村に陰陽師などはいなかったのか？」

「…それがな、一人も宿ってなかったらしい…なすすべも無く、村の人間が、怪や鬼などに喰われていったらしいのだ…。」

親父殿は、厳しい表情で、あご髭を撫でながら重苦しい声でそう答

える。

「なんて酷い…」

俺も、その村の住人達を哀れむようにそう呟いていた。

近頃、悪鬼や妖が夜に現れて、人を喰らうという出来事が多い。まして、百鬼夜行に遭遇するなど、災害にも等しい事態だ…。

妖や悪鬼が、多くはびこるようになったこの世の中、陰陽師などの存在は今では必要不可欠なのだ。

「それでだ…その百鬼夜行がこの村にも現れるかもしれない。という事でな、強い妖力に反応するあの妖刀の様子を見てきて欲しいのだ…」

「なるほど、わかった。飯を食い終わったら、早速、祠に向かって見るとしよう」

あの妖刀は、強い妖力を感じると、ほのかに赤い光を放つようになっている…。

（中に封印されている妖が共鳴しているんだか、どうだか、理屈はわからんが…）

とにかく、太刀を見てくれば怪が近くに居るかどうかわかるということだ。

「では、頼んだぞ…俺は村に張ってある結果が弱まってないか、村の陰陽師と共に周辺を回ってくる。くれぐれも、太刀に触らないように気を付けてな…」

「ああ、わかっている。親父殿も気を付けて…」

俺は飯を食い終わると、すぐさま、祠へと向かった。

これから、何が起こるかも知らずに……。

一節 最後の平穩（後書き）

一話目です。更新遅いですが、感想やご意見など良かったらお聞かせください。 m (| |) m

二節 妖刀 憐奈

村から一里ほど離れた山の中に、その祠はひっそりと存在する。祠の入口付近は、崖になっていて、そこから村一面が見渡せるようになっていた。

相変わらずいい眺めだな…。

俺はそんな悠長なことを考えながら、祠の中へと入っていく。

中は薄暗く、肌寒い空気が俺の周囲を包み込んだ。

先が暗闇で見えないので、俺はすぐさま持つてきたろうそくに火を灯す。すると、ほのかな灯りが幾寸先まで辺りを照らしていった。

「もうそろそろ見えてくる頃だが…」

足下に気を付けながら、ゆっくりと祠の奥へと進んで行く。しばらく足を進めると、堅く閉ざされた扉が俺の目に入ってきた。

鍵は親父殿から預かっている。

俺はすぐさま鍵穴に鍵を差し込んだ。

がちゃり、と鈍い

音が静かな祠の中に響きわたる。

「開いたな…」

扉が開いたことを確認した俺は、ゆっくりと扉に手を掛けて押し開いた。

「相変わらず気味が悪いな…。ここは…」

扉の先には、何本もの頑丈な鉄の鎖に繋がれ、鞘から抜けないように完璧に固定された一振の太刀が祭壇の上に掛けられていた。

部屋の中を見渡して見ると、陰陽師が施した術符があちらこちらへと張られている。

勿論、太刀自体にも所々に術符が張られていた。

この場所にくるのは初めてではないが、やはりこの、不穏な空気には慣れることができない…。

俺は、さっさと太刀の反応を見て帰ることにした。

「うむ…特に異常はないな」

しばらく、太刀の様子を確認していたが、特に異常も見られない。

強力な妖が里に近づく赤く、眩い光を放つ…と親父殿も言っていたが、そんな様子は見られなかった。

ということとは、近隣の里を襲った妖達がこの辺りにいるとは考えづらい…。

どうやら、親父殿の見回りも取り越し苦労で終わりそうだな。

まあ、何はともあれ、これで村の者達も安心できるということだ。

俺は、ほっと安心して祠から出ようと妖刀を祀ってある祭壇に背を向けて歩き出した。

その刹那……！

『我が物となれ…』

突如、俺の耳に凜とした女の声が入ってきた。

「なっ!？」

ぞくり…と背筋に戦慄が走る。

とっさに聞こえてきた声に反応して、俺はすかさず後ろを振り向いていた。

しかし、そこには誰もおらず、妖が封印されたおぞましい妖刀が、祭壇の上に静かに鎮座しているだけだ。

まさか、この太刀の中にいる妖か？

いや…まさかな…。

あれだけの、陰陽師達による術や符で封じられているんだ。太刀の中にいる妖は、喋ることすらままならない状態のはず…。

最近働き詰めで疲れていただけだろう。

俺は、無理矢理にでもそう思いこみ、逃げるようにその場を後にし

た。

頭の中に、はつきりと聞こえてきた女の声……。

一体何だったのだろうか…？

俺は、祠の出口が見え始めた所で安堵の息を吐き、冷静にさつき起きた出来事について考えていた…。

やはり、あの声の主は太刀に宿る妖なのだろうか？

そういえば、親父殿からあの太刀に宿る妖について聞かされたことが幾つかある。

一つは、太刀の中に宿った妖は、もとは人間で、美しい女性だったが、あまりにも酷な命運をたどり悪鬼へとなり果てたこと。

もう一つは、その荒れ狂う悪鬼を波我の一族が、命を掛けて太刀に封印したこと…。

そして、最後に…美しくも恐ろしいと言われ続けたその伝説の鬼姫の名前…。

彼女の名は……憐奈

この世の理を揺るがした伝説の鬼姫…。

二節 妖刀 憐奈

(後書き)

仕事の都合上、更新いつになるかわかりませんが、感想などお待ちしております m () () m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2609b/>

理を揺るがす者

2010年10月29日06時01分発行